



2021年度語学検定講座報告

著者	洪 潔清, コンスタンティネスク チェザル, 大森 洋子, 李 善姫, 塩谷 祐人, 徳間 晴美
雑誌名	明治学院大学教養教育センター附属研究所年報 : synthesis = The annual report of the MGU Institute for Liberal Arts
巻	2021
ページ	20-25
発行年	2022-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10723/00004334

2021年度語学検定講座報告

中国語部門：洪潔清

2021年度の「中国語資格試験対策講座」は昨年度の秋学期に続き、オンライン形式で実施した。以下は担当教員が提供した情報に基づいてまとめた実施報告である。

1. 実施方法について

三つの講座はいずれもmanabaとZoomを併用して実施された。実施例としては以下の方法が挙げられる。manabaでは主に筆記問題を扱った。コンテンツに文法の要点を掲載し、小テストにはその文法項目の知識が問われた過去問をドリル形式にまとめ、参加者が毎回一つの文法事項を確実に習得することを目指した。manabaの筆記問題のドリルに取り組む参加者が減少傾向になった場合は、Zoom授業の中でも筆記問題を解かせる時間を設け、参加者の学習を促した。

また、いずれの講座においても受講者の苦手な分野はリスニングと見られるため、Zoom授業中は過去問の練習を通してリスニング強化に力を注いだ。例えば、その回の問題文が全く聞き取れないことを避けるために、また語彙力のアップを図るために、予め問題文のキーワードリストをQuizletというツールを利用して配布した。そのうえでZoomの中でリスニングの過去問を解かせる。その際はスクリプトなしとありの二つのパターンを準備し、両方やらせることで音声を聞く機会を増やすとともに、スクリプトなしでは聞き取れない語句を認識させる効果を狙った。解答後は問題文を参加者に簡単に訳させることで理解の不十分なところを把握し、重点的に解説を行った。

2. 受講者について

受講者数は多くないが、出席者は最初から最後まで大変真面目に勉強していた。少人数授業で、練習機会が多かったため、いろいろな表現を聞き取れるようになっただけでなく、上手に話せるようになり、一定の日常会話ができる能力を習得したと見られる。

また今年度も一年生の参加者がいた。一部は途中で自身の学力の不足を理由に受講辞退を申し出てきたが、最後まで努力して受講を続けた一年生もいた。

3. 今後の課題について

昨年度に続き、今年度も中検とHSKでクラスを分けることが望ましいとの意見が寄せられている。とりわけ、二つの試験のリスニング形式や出題される語彙が異なるため、4回ずつ扱くと、十分な時間がとれず、学習指導が不十分であることが指摘された。

また、Zoomというリアルタイムの授業方式は対面授業とほぼ同様な効果が得られたことから、今後正規授業が対面式に戻っても、資格対策講座が現在のmanabaとZoomの併用方式で実施することが可能ではないかという現場からの声が上がっている。従来の参加者数からもオンライン

形式のほうが多い。さらに、オンライン形式の場合は、参加者がmanabaによる配信型にするか、Zoomによるリアルタイム授業にするか、または両方に参加するか、自由に選択できることから、より多くの学生に参加してもらうことには今後の課題として検討すべき提案ではないかと思われる。

ドイツ語部門：コンスタンティネスク チェザル

2021年度のドイツ語検定試験対策講座は、春学期の水曜5限に3級対策講座（白金）、秋学期の同じく水曜5限に4級対策講座（横浜）を、いずれも佐藤修司氏（本学非常勤講師）の担当で、オンラインにより開催した（それぞれ全8回）。

両講座ともZoomを使用してのリアルタイム型の授業を実施したが、参加することのできない学生もいたため、教材資料をmanabaにアップロードし、適宜学生が自修した上で、質問等がある場合は同じくmanabaを通して受け付け、回答するオンデマンド式（教材提示型）の授業も併用した。

3級対策講座は、過去の出題内容を踏まえた文法等の解説用教材を用意し、学生にはそれを参照した上で過去に出題された問題に解き方のヒントをつけてアップロードしたものを解かせ、授業中に答え合わせを行った。第1回～第5回授業時には文法問題を、第6回～第8回授業時には長文問題と聞き取り問題とを扱った。また、語彙力の向上を図って単語集を紹介したほか、授業時間内に扱うことのできなかつた問題に関しては、解き方と解答をつけたプリントを作成、配布した。ちなみに、リアルタイム型、ならびに教材提示型の授業に参加した学生数は2名であった。

4級対策講座も、3級対策講座と同じように、文法等の解説用教材と解き方のヒントをつけた過去に出題された問題を用意し、授業時に答え合わせを行った。文法問題に関しては第1回～第7回授業を充て、第6回授業以降は、加えて長文問題と聞き取り問題も扱った。また、授業時間内に扱うことのできなかつた問題に関しては、解き方と解答をつけたプリントを作成、配布した。ちなみに、リアルタイム型の授業に参加した学生数は3～2名、教材提示型のそれのみに最後まで参加した学生数は他に2名であった。

なお、両クラスとも学習の進捗度を確認するために、毎授業時に短い課題を提出させた（ただし、提出は任意とした）。

スペイン語部門：大森洋子

スペイン語DELE準備講座は、今年度は、講師の先生との連絡をとりながら、Zoomとmanabaを使って行った。さらに、DELEと目的を同じながら、パソコン受験が可能で、年間の受験チャンスが多いSIELEの準備にも適する講座として開講している。

1. 募集に際して

オンライン講座となったため、まず学習歴があることを条件に募集を行った。教室での講座の場合には、学生の学習状況を細かく観察できるために、意欲のある学生については学習を始めたばかりの学生も対象にしたが、今回は、1年以上の学習歴をもつ学習者に限った。応募者は、具体的に11月、または次年度の5月のDELEの試験を受けようという意欲的な学習者が多く、DELE試験についての知名度が上がってきたことを実感した。しかしながら、やはり、オンラインでの広報の仕方に限界があるのか、申込者数の減少が見られた。

夏休みのコースでは、5日のコースであり、レベルが自分の目的や学習レベルにあっていない学生もいて、最後は2、3人の出席になってしまった日もあったが、それでも目的をもった学生が熱心に授業に臨んでいたという報告を受けている。

秋学期についても、オンラインで講座を行ったため、普段は横浜開講のために白金で授業を受けている学生の受講が難しかったが、今回はその問題が解消した。さらに、水曜日でいろいろなイベントもある中で、11月のDELE試験まで、講座をうまく活用した学生も見受けられた。

2. 講座内容について

昨年の問題点として指摘した教材の配布等であった。Manabaを利用して行ったが、Manabaに載せる教材が不鮮明で学習しにくいなどの問題が解決されつつあると言える。

今回は、講師もZoomによるオンライン授業にも慣れたことで、スムーズに講座は進められたようである。

3. 総括

受講者は少なかったようであるが、学習者のスペイン語を学ぶモチベーションの一つとしてDELE試験受験、またSIELE受験などの可能性を学生に知らせていくことで、自律学習の姿勢が身についていくのではと期待しているところである。それが、外国語教育、スペイン語教育のレベルアップにつながっていくだろうと考えている。

本講座の実施にあたっては、LMSでのコース設定、アカウント作成など教養教育センタースタッフ、教務部スタッフ、情報センタースタッフにさまざまな協力をいただいた。改めて謝意を表したい。

韓国語部門：李善姬

2021年度韓国語の語学検定講座は、オンライン同時双方向型(Zoom)の形態で実施された。担当講師、実施期間、参加人数などは次のとおりである。

クラス	担当講師	実施曜日・時限	実施期間	参加人数
TOPIK I -1級	秋賢淑	月曜日4時限	5月10日～ 6月28日 9月27日～11月29日	3～8人 1～4人
TOPIK I -2級	金南听	木曜日5時限	5月13日～ 7月1日 9月30日～11月25日	3～10人 1～5人
TOPIK II	崔静仁	月曜日4時限	5月10日～ 6月28日 9月27日～11月29日	2～8人 2～13人

●学習内容

TOPIK I -1級クラス、TOPIK I -2級クラス、TOPIK IIクラス共に、過去問の「読解」「聞き取り」の問題を解きながら、質問に回答した。授業以外の時間の質問については、manabaを利用し、学生の質問に回答した。毎回テストを行うことで、学習到達度の確認を行った。TOPIK IIクラスはmanabaの個別指導を使用し、「作文」の添削指導を行った。また、TOPIK-1級クラスは、当該時間に参加が難しい学生のために、第5回～第8回の講座をオンデマンドでも実施した。

●学生の反応と成果

学生からは、「自分一人で勉強するのに限界を感じたが、対策クラスがあって、積極的に臨むことができた」という意見があり、講座担当の先生からは、「最初はレベルの差が大きく、難しく感じる学生もいたが、講座に続けて参加することにより後半は学生の学習上達が見れた」ということが伝えられた。

春学期に比べ、秋学期は参加人数が少し減少したが、全体的にオンラインで講座が実施されたことで、対面で実施した時より多くの学生が意欲的に参加できたと思われる。

フランス語部門：塩谷祐人

■仏検3級対策講座

昨年度は新型コロナウイルスの影響により秋学期のみの開講であったが、2021年度は春学期と秋学期の両学期で開催することができ、昨年度に引き続き、本学非常勤講師の檜垣嗣子氏が担当した。

オンラインによる開講で春学期は8名、秋学期も同じく8名がエントリーし、回が進むにつれて出席者が減少したものの、それでも春学期は半数以上が最後まで継続的に出席し、秋学期に関しては試験直前の回まで7名が参加していた。

事前にmanabaを通じて過去問題を配布し解いてもらい、Zoomでその解説を行うという形式は、

実践的な力を伸ばすための有効な手段であったと考えている。実際に秋学期に受講したさまざまな学科の学生からは、それぞれ4級から準2級の検定試験に合格したとの報告もなされている。

また白金／横浜キャンパスの制限がなく受講しやすいことを考えても、manabaとZoomを併用したやり方は、今後対面授業が中心となったとしても継続して行う可能性を検討したい。一方で、90分のオンライン講座では解説に多くの時間を費やすことになってしまったため、事前の説明を詳しくしたり、3級の難易度に躊躇してしまう学生へのサポートを行ったりする必要があるという課題もみえてきた。

■仏検4級対策講座

昨年度までは3級対策講座のみの開講であったが、2021年度から新たに4級の受験者を対象にした講座を開講し、本学非常勤講師の加藤美季子氏が担当した。春学期は14名、秋学期は8名のエントリがあった。しかしオンラインでの開催という気軽さのためか、回が進むにつれて参加者が減少したため、今後の改善策を考えたい。

とはいえ、秋学期中に1回だけ参加者が0名の回があったものの、常に参加する学生がいることを考慮すれば、とりわけ初習外国語としてフランス語を学習する学生のためには、今後も継続して開講し、様子を見るべきであると考えている。また秋学期に参加者が0名になったのは、大学の授業形態が切り替わる時期であり、学生の学習環境によって生じる負担を踏まえた対応も考える必要があると思われる。

今回はmanabaを通じて過去問題を事前に配布し、Zoomによる双方向の講座で解説などを行った。その方式は受講場所の制限が少ないなどのメリットがあり、また学習効果も高い。対面授業が可能となった後も、対面形式の利点と比較しつつ、オンライン形式も選択肢の一つとして残しておくべきであろう。

日本語部門：徳間晴美

2021年度に、日本語関連講座として「JLPT（日本語能力試験）講座」および「日本語教育入門講座」を新たに開講することができた。以下、それぞれについて報告する。

■JLPT（日本語能力試験）講座

春学期はN1レベルとN2レベル、秋学期はN1レベルのみを開講し、それぞれ7月と12月の試験日前に実施した（全8回）。講座はmanaba（LMS）を利用して学生への連絡や資料配布を行い、授業はZoomでの同時双方向型で進められた。受講生は、JLPTの受験予定者や日本語能力向上を目的とした留学生などがおり、いずれの講座も10名以内で、個別の質問にも応じやすく、積極的に参加する学生の様子が見られた。

講座の内容については、留学生のニーズを把握しつつ、苦手とされる語彙や文法を取り上げ、学生の理解度や習得度に応じた解説を行うなどした。いずれの講座の担当者からも、大学入学後の留学生にとって、意義のある講座であったとの報告がなされた。

私費外国人留学生枠で入学する留学生の場合、大半はJLPTのN1レベルに合格しているが、入学後にN1合格を目指す留学生もいるため、多忙な大学生活を送る中で、掲げた目標を諦めないようJLPT講座を有効に活用してもらいたい。また、本学には、正規留学生以外にも、日本語学習を必要とする多様な背景を持つ学生が各学部にも相当数いるため、今後、広報を十分に行い、それらの学生にもJLPT講座の受講を勧めたいと考える。

■日本語教育入門講座

本学では、明治学院共通科目として多文化共生関連科目が開講されており、授業担当者からも、日本人学生の中に日本語教育という分野に関心を持つ学生がいるという話を耳にしていた。一定のニーズがあることが見込まれていたこともあり、2021年度に日本語教育学の入門が学べる講座として新設し、募集を行った。受講生は10名から15名で、留学生もわずかではあるが含まれていた。

授業は、上記のJLPT講座同様の方法で実施した。入門ということもあり、受講生同士で考え、話し合う時間が多く取られ、普段とは異なる視点で日本語や日本語学習を捉えることが重視された。受講生からは、普段無意識に使っている日本語の難しさに気づいたといった意見や、日本語学習の難しさに更なる興味を持つようになったという声が聞かれた。様々な理由で日本語教育に関心を持つ学生がいることもわかり、在学中や卒業後にも役立つ学びがこの講座で提供できていると考える。

日本語教育関連の試験としては「日本語教育能力検定試験」（年1回・10月実施）があるが、今年度の様子からは、まずは入門講座として日本語教育に関心を持つ学生に、日本語を教えるとはどういうことであり、社会の中ではどのような位置づけや重要性がある分野なのか等について考える講座として継続できれば幸いである。